

# インフルエンザについて

+

平成 22 年度  
データ

+

インフルエンザ  
とは

+

インフルエンザ  
の分類

+

症 状  
(初期症状を含む)

+

インフルエンザ  
かな?と思ったら

+

検査と治療

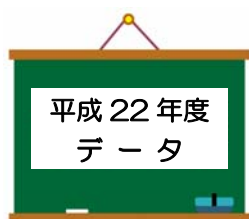
+

感 染 予 防

※上の目次をクリックするとそれぞれの項目に移動します。

(項目が見あたらない場合は、同じページ内にありますので、下にスクロールしてみてください。)

※文字を大きくしたい場合は、マウスを右クリック→【ズームツール⇒ズームイン】にて調整してみてください。



相澤病院に平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月に入院した患者さんのデータです。

## ◎入院患者数◎

インフルエンザで入院した患者数※ <sup>1</sup>	6 人
そのうち インフルエンザの治療を中心に行った患者数※ <sup>2</sup>	2 人
インフルエンザ以外の治療を中心に行った患者数※ <sup>3</sup>	4 人

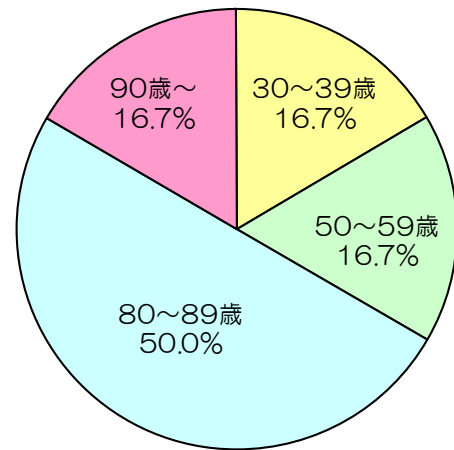
※<sup>1</sup> 入院患者で入院時にインフルエンザ感染が認められた人数です。

※<sup>2</sup> 入院中の最も医療資源を投入した傷病名がインフルエンザまたはインフルエンザ肺炎<sup>はいえん</sup>だった患者数です。

※<sup>3</sup> インフルエンザをきっかけに、心不全<sup>しんふぜん</sup>や喘息<sup>ぜんそく</sup>が悪化したり、細菌感染<sup>さいきんかんせん</sup>による肺炎を合併したりして、インフルエンザ以外の治療を中心に行った患者数です。

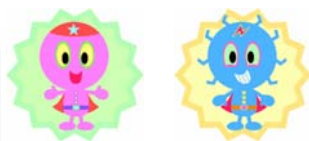
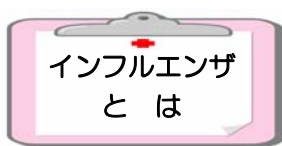
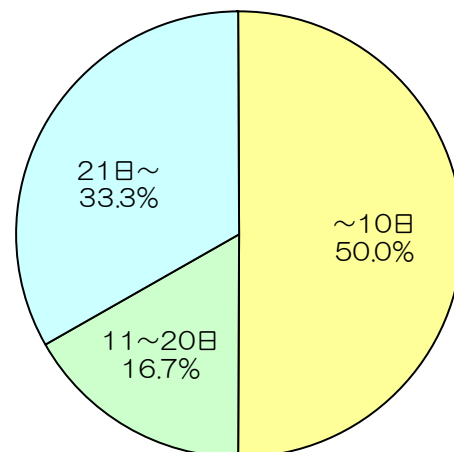
◎年齢構成◎

30～39歳	1人
50～59歳	1人
80～89歳	3人
90歳～	1人

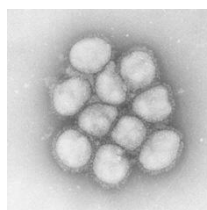


◎インフルエンザで入院した患者の在院日数の分布◎

～10日	3人
11日～20日	1人
21日～	2人



インフルエンザとは、<sup>きどう</sup>気道の<sup>ねんまく</sup>粘膜にインフルエンザウイルスが<sup>かんせん</sup>感染して引き起こす急性の炎症です。「感染」とは、インフルエンザウイルスが体内に入ることを行います。その後、体内でウイルスが増えると、症状が出てきます。これが「<sup>はっしょう</sup>発症」です。感染しても症状が出ない場合もありますが、後に述べるように重症化しやすい方もいます。



新型インフルエンザウイルスの  
<sup>でんしけんびきょう</sup>電子顕微鏡写真（国立感染症研究所）

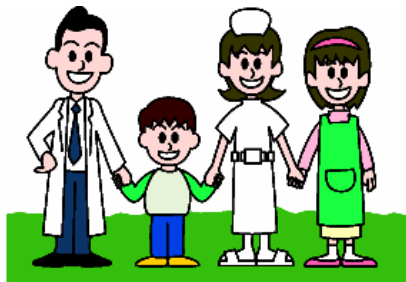
## インフルエンザ の分類

インフルエンザウイルスはA型、B型、C型に分類され、大きな流行の原因となるのはA型とB型です。それぞれの型はさらに細かく分類され、平成21年度に世界的に流行した、豚に由来する「新型インフルエンザ（H1N1）」は、A型のインフルエンザウイルスです。

### ◎新型インフルエンザについて◎

インフルエンザに一度かかると、その原因となったウイルスに対して、抵抗する力（免疫）が高まります。以前から流行している季節性インフルエンザに対しては、多くの方が免疫をもっていることになります。しかし、新型インフルエンザには、誰もが抵抗する力を持っていないと考えられます。そのため、感染が拡大しやすく、わたしたちの健康や社会生活に大きな影響を与える可能性があります。

世界保健機関（WHO）は、平成22年8月に新型インフルエンザの大流行（パンデミック）の終息を宣言しました。しかし、新型インフルエンザはなくなった訳ではなく、一度流行が終わった後にも再び流行する可能性があります。今後起こりうる流行に備えて、日頃の感染予防やワクチン接種など、自分自身や周囲の方を守る対策が重要です。



**症 状**  
(初期症状を含む)

かぜとの違いは、のどの痛み、鼻水、咳などの症状の他に、高熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、強い全身倦怠感（だるさ）などの全身症状がみられることが特徴です。また、インフルエンザウイルスによりダメージを受けた気道の粘膜に細菌が感染して、肺炎や気管支炎を起こすこともあります。

	インフルエンザ	か ぜ
症 状	高熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、咳、のどの痛み、鼻水など	のどの痛み、鼻水、鼻づまり、くしゃみ、咳、発熱（高齢者では高熱でないこともある）
発 症	急 激	比較的ゆっくり
症状の部位	強い倦怠感など全身症状	鼻、のどなど局所的



※新型インフルエンザでは、吐き気や下痢などの消化器症状が多い可能性も指摘されています。

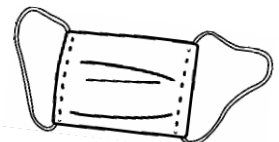
新型インフルエンザでは、ほとんどの方が軽症で回復していますが、以下のような慢性的の病気をお持ちの方は、インフルエンザに感染すると重症化するリスクが高いといわれています。



- ◆ 慢性呼吸器疾患
- ◆ 慢性心疾患
- ◆ 糖尿病などの代謝性疾患
- ◆ 腎機能障害
- ◆ ステロイド内服などによる免疫機能不全

さらに、次に該当する方も、インフルエンザが重症化することがあると報告されています。

- ◆ 妊婦
- ◆ 乳幼児
- ◆ 高齢者



手洗い・うがいの励行や人混みを避けるなど感染しないように注意し、周囲も感染させないように配慮が必要です。また、かかりつけの医師がいる場合には、発症時の対応について相談しておきましょう。

## ◎インフルエンザ<sup>のうしゅう</sup>脳症とは◎

インフルエンザ発症後から早期の段階（多くは 24～48 時間以内）で、嘔吐<sup>おうと</sup>や異常行動、意識障害（呼びかけに答えられないなど）、けいれんなどがみられるもので、主に 5 歳以下の乳幼児がかかかります。このような症状がみられた際には、速やかに医療機関を受診して下さい。



### インフルエンザ かな?と思ったら

インフルエンザを疑う症状があった場合、医療機関に必ず受診しなければならない訳ではありません。症状が軽く、自宅で療養できる方は、受診の必要はありません。ただし、常備薬をご使用になる際には、<sup>そうごうかんぼうやく</sup>総合感冒薬や<sup>げねつざい</sup>解熱剤にはインフルエンザのときには使用を避けなければなりません。特に小児（15 歳未満）では、<sup>じゅうとく</sup>重篤な副作用（ライ症候群など）や脳症を増悪させる可能性があるため、使用禁止の解熱剤が多数あります（アセトアミノフェン以外の薬は使用しません）。どうしても小さいお子さんに薬を服用させるか<sup>ざやく</sup>坐薬を使用する場合には、必ず説明文をお読みになるか、主治医に相談して下さい。

また、先の項目で紹介した重症化するリスクのある方は、インフルエンザを疑う症状があった場合には、なるべく早めに医師に相談して下さい。

もともと健康な方でも、次のような症状がある場合には、すぐに医療機関を受診して下さい。

#### ◎ 小児 ◎

- ◆ 呼吸が速い、息苦しそうにしている。
- ◆ 顔色が悪い（土気色、青白いなど）。
- ◆ 嘔吐<sup>おうと</sup>や下痢<sup>げり</sup>が続いている。
- ◆ 落ち着きがない、遊ばない、反応が鈍い。
- ◆ 症状が長引いていて悪化してきた。

#### ◎ 大人 ◎

- ◆ 呼吸困難または息切れがある。
- ◆ 胸の痛みが続いている。
- ◆ 嘔吐や下痢が続いている。
- ◆ 3 日以上、発熱が続いている。
- ◆ 症状が長引いていて悪化してきた。

かかりつけの医師がいる場合には、電話をして受診時間や受診方法などを確認してから行くようにします。かかりつけの医師がいない場合には、発熱患者の診療をしている近くの医療機関に電話をして、受診時間などを確認します。

当院の救急外来は 24 時間対応が可能ですが、インフルエンザを疑う症状で受診の際にはお電話のうえ、マスクをつけてお越し下さい。また、妊婦さんも産婦人科外来ではなく、救急外来で診察します。

相澤病院 救命救急センター 0263-36-9999 (直通)



※かかりつけの医療機関がある場合には、まずは普段みていただいている先生にご相談下さい。

治療・療養により熱が下がっても、インフルエンザの感染力は残っていて、周りの人に感染させてしまう可能性があります。少なくとも、次の期間は外出をしないようにします。

熱がさがってから 2 日目まで…外出しないように心がける

新型インフルエンザの場合には、症状がなくなってからもしばらくの間、感染力が続く可能性があることが分かってきています。さらに次の期間もできるだけ外出しないようにして下さい。

発熱や咳、のどの痛みなど症状が始まった日の翌日から 7 日目まで…できるだけ外出を控える



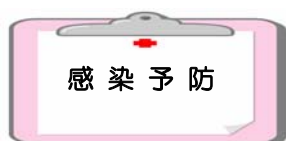
検査と治療

このページの先頭へ戻る



38℃以上の発熱があり、症状からインフルエンザが疑われる場合、医療機関での通常の検査では、鼻やのどの粘膜を綿棒で擦って採取して、インフルエンザウイルスに感染しているか調べる「迅速診断キット」が用いられます。15分以内で結果が分かりますが、感染した直後だとウイルスの量が少ないため、検査結果が陰性(感染なし)となる場合もあります。そのため、検査結果だけではなく、症状や地域でのインフルエンザの流行具合なども参考にして、医師が診断を行います。

治療薬には、タミフル（カプセルかドライシロップ）やリレンザ（吸入薬）、イナビル（吸入薬）、ラピアクタ（点滴）などの抗インフルエンザウイルス薬があります。これらの薬は医師が必要と認めた場合に使用されます（なお、発症後 48 時間を過ぎると十分な効果が期待できません）。また、症状を和らげる目的で、解熱薬や咳止めの薬などを使用することもあります。



### ◎インフルエンザの主な感染経路◎



- ◆ **飛沫感染**（ひまつつかんせん）…感染している人のくしゃみや咳（せき）で出るしぶき（飛沫）を吸い込むことにより、感染します。しぶきは 2 メートル程度飛ぶといわれており、その範囲内にいる人は感染の危険性が高くなります。
- ◆ **接触感染**（せつしょくかんせん）…感染している人の唾液（たえき）や鼻水が手から手へ、あるいはドアノブやつり革などを介して手に付着し、その手で目や鼻、口などの粘膜（ねんまく）に触れることによって感染します。

### ◎インフルエンザにかからないようにするために◎

- ◆ **ワクチン接種**…ワクチンはインフルエンザの発症を抑えたり、症状を軽くしたりする効果があります（ウイルスが体内に入ってくるのを防ぐことはできません）。ワクチンの効果は少しずつ低下していくこと、インフルエンザウイルスは少しずつ変化していくことから、ワクチンは毎年接種したほうがよいとされています。また、ワクチンの効果が出現するまで 2 週間くらいかかるため、流行が始まる前の 12 月中旬までに受けることが望ましいです。
- ◆ **手洗い・うがい**…手指やのどの粘膜についたインフルエンザウイルスを除去します。手洗いは石けんを使用して、15 秒以上かけて丁寧に洗い、洗ったあとには清潔なタオルなどで水分を拭き取ります。
- ◆ **外出を控える**…インフルエンザが流行している地域では、極力人混みを避けます。



## ◎インフルエンザをうつさないようにするために◎

- ◆ 咳エチケット…万が一、インフルエンザにかかってしまった場合には、咳やくしゃみによるしぶきが飛ばないように、マスクをつけます。マスクをつけていない時に咳やくしゃみが出る場合には、他の人から顔をそむけて、ティッシュなどで口と鼻を覆います（その後、手洗いをします）。また、使用後のティッシュやマスクはすぐにゴミ箱に捨てます。



## 今シーズンのインフルエンザワクチンについて

平成 22 年度のインフルエンザワクチンは、新型インフルエンザと季節性インフルエンザ（A 香港型、B 型）の 3 つに効果があるワクチン（3 価ワクチン）と、新型インフルエンザのみに効果があるワクチン（1 価ワクチン）の 2 種類がありますが、3 価ワクチンの接種が広く行われる予定です。接種回数は 13 歳未満の方は 2 回接種ですが、それ以外の方は 1 回接種です。

昨年度はワクチン接種の優先順位がありました。今年度は希望する人は誰でも接種を受けることができ、ワクチンの量も十分にあります。接種にかかる費用は市町村・医療機関ごとに異なります。また、高齢者や所得の低い家庭（生活保護世帯や住民税非課税世帯）は助成を受けられる場合がありますので、市町村の窓口にご相談下さい。



参考資料；

厚生労働省ホームページ [「感染症情報」](#)

日本呼吸器学会ホームページ [「呼吸器の病気・インフルエンザ」](#)  
(該当のホームページへリンクしています。「」内をクリックして下さい。)



※掲載されているインフルエンザに関する内容は、平成 22 年 11 月 1 日現在のものです。

## ● 発熱したお子さんを見守るポイント ●

# こんな症状を認めたらもう一度受診しましょう

新型インフルエンザであっても、ほとんどのお子さんが季節性インフルエンザと同様に、3日から5日間発熱が続いた後に自然に治ります。しかし、まれに急性脳症<sup>きゅうせいのおうしょう</sup>、心筋炎<sup>しんきんえん</sup>、肺炎<sup>はいえん</sup>を合併したり、脱水<sup>だっすい</sup>を起こすことがあります。そこで、自宅で療養するときは、お子さんをひとりにせず、以下に示すような症状に気をつけて、定期的に状態を見守るようにしましょう。

自宅で療養しているお子さんの状態を定期的に確認してください。そして、お子さんに次のような症状を認める場合は、なるべく早く医療機関で診察を受けましょう。

### 新型インフルエンザ症状チェックポイント

- 手足を突っ張る、がくがくする、眼が上を向くなど、けいれんの症状がある。
- ぼんやりしていて視線が合わない、呼びかけに答えない、眠ってばかりいるなど、意識障害の症状がある。
- 意味不明なことを言う、走り回るなど、いつもと違う異常な言動がある。
- 顔色が悪い（土気色、青白い）。唇が紫色をしている（チアノーゼ）。
- 呼吸が速く（1分間に60回以上）、息苦しそうにしている。
- ゼーゼーする、肩で呼吸をする、全身を使って呼吸をするといった症状がある。
- 「呼吸が苦しい」、「胸が痛い」と訴える。
- 水分が取れず、半日以上おしっこが出ていない。
- 嘔吐<sup>おうと</sup>や下痢<sup>げり</sup>が頻回にみられる。
- 元気がなく、ぐったりしている。

※ここで挙げた症状以外でも、いつもと様子が違って心配な場合には、かかりつけの医師などの医療機関に相談してください。

上記のような点に注意すれば、新型インフルエンザは、家庭で特別な対応をしなければならない病気ではありません。周囲への感染防止に配慮しながら、発熱したお子さんをいつものように家庭で見守ってあげてください。（厚生労働省・日本小児科学会）

相澤病院 救命救急センター 0263-36-9999（直通）

